

# テレカコレクション 第16回 コミック編

健



「DOKU - GAKU」もいよいよ次号が3周年。企画では今まで読まれた本の分析を踏まえて特集するという事なのでテレカコレクションも次回は小説・文芸雑誌をやってみようかと思っています。で今回は、多分小説より読まれているにも拘らず読書リストへの登場が少ない漫画を取り上げることにしました。



漫画は上に3人の姉がいたから物心ついた時はすでに身近にあり学校にあがる前から読んでいた。(この頃は自分の回りには幼稚園に行かない子の方が多かった)当時の漫画本は月刊誌か単行本だったが、記憶の古いのは「少年クラブ」。月光仮面やよたろうくんが載っていたやつだ。その他冒険ダン吉、ロボット三等兵、ピリーパックなんてのも記憶にはあるもののリアルタイムで読んだ記憶が無いから古本の単行本で読んだのかも。

世の中も不景気ながら落ちついてきて漫画の人気も上がると月刊誌の出版も相次いだ。この辺の事情は藤子不二雄の「まんが道」を読むと詳しく載っている。

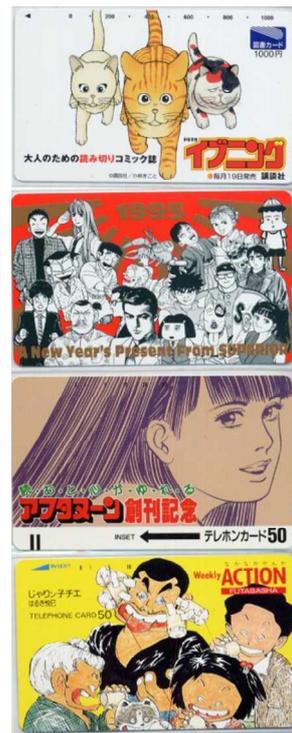
読んでいた漫画誌を列挙すると「日の丸」、「少年」、「少年画報」、「少年ブック」、「ぼくら」、「おもしろブック」、「冒険王」、「痛快ブック」、「少女」、「少女ブック」、「なかよし」、「りぼん」。



昔の漫画月刊誌は今ほど漫画にスペースを割いておらず漫画の他、特集(図解、写真)、絵物語、科学、不思議現象、大事件などの記事も多かった。



それにスポーツ選手やタレントのインタビューなんかもよく載っていた。長島茂男、松島トモ子、坂本九、森山加代子、田代みどりといったところはイメージにあやかった漫画のキャラクターとしていろいろな作品で使われていた。(例えば長島は、わちさんべいのナガシマくん、チャコちゃん日記のボーイフレンド役とかね)。娯楽に飢えていたから記事にいたるまで隅から隅まで読んでいた。今でも多種の雑誌を読むのは漫画月刊誌の影響かも知れない。もっとも、出版社の売上げ競争も熾烈になると別冊や付録合戦になり、本誌に載せきれない長編や外国TV、名作文学ものも別冊の形で漫画化された。よくおぼえているのは「ララミー牧場」でこれは松本あきら(松本零士)が番組を忠実に漫画化していた。



漫画を読む環境としては書店、貸し本、古本屋、変わったところでは床屋。美容院でも週刊誌が置いてあるようにどこでも漫画を沢山置いていた。中には自分は散髪しないのに友達にくっついて行って漫画だけ読んでいるやつもいた。最も僕なんか兄弟が多かったから妹や弟を連れていっては貪るように読んでいた。客が多ければそれだけ長く読めるから混んではいいなあなんて思っていた。



そういう中で本屋で売っている本と貸し本屋にしかない本は何か違うぞという意識は子供心にもあった。表と裏の世界のように貸し本の漫画は怪談、殺人、犯罪、残酷を売り物にし、かつ迫力のあるものが多かった。もちろんそればかりではないが人気の作品の模倣も多かったかな。貸し本の少女まんがなんか継母ものとスター、バレリーナものの組合せばかりでこれですっかり少女まんがに偏見を持ってしまった。もっとも横山光輝やちばてつやの描く少女まんがはジャンルは同じでも絵・ストーリー展開が良く好きだった。とくにちばてつやの「123と45ロク」「ナナトリ」なんかは感動



もののジャンルではあるが話の中に絶妙な間でギャグを入れるものだから笑いが止まらなくなることもしばしばだった。ちなみに僕は爆笑マンガをよんでも笑うことは殆ど無い。

貸し本で覚えているのは「泉」かな。裏表紙の絵がろうそくが燃えているやつでこれは恐怖ものが多くなぜか記憶に残っている話が多い。



漫画というものについて考えを改めさせられたのが永島慎二の「漫画家残酷物語」だった。

それまでは漫画 = 娯楽であり、ヒーローもの、アクションものを楽しむものであったから漫画を描くこ



とに青春をかけたり、作者の苦悩する姿を描いた作品には伝わって

くるものがあり作品の中に投影された作者あるいは実名で登場する

作者自身のセリフや行動にかなり影響を受けた。この作品は黄色い

涙シリーズとしては28篇つくられた。作品の内容は時にシリアス、時

にコミカルなストーリーで漫画にける作者の思いを描く。絵も作品に合

わせ時に柔らかく、時にシャープであり、モチリアニ調のデフォルメを用

いたりしていておおいにはまってしまい漫画家に憧れたこともあった。

一連の作品の中では「陽だまり」が好きだ。「漫画家とその弟子」も

押しかけの弟子を受け入れたものの弟子の漫画に対する考え方、

生き方のギャップから起こるやりとり、顛末が私小説のスタイルにな

っていて深刻な話をコミカル仕立てにしている面白かった。新宿、

中野、阿佐ヶ谷、吉祥寺などの街を徘徊したのもこの作品と後に続

く「フーテン」の影響でこれらの街の喫茶店では随分時間を潰した。自分たちと同世代のかわぐち

かいじもはっきり漫画家を目指した原点が永島慎二というからちょっと信じられない。絵も一時、永

島慎二の絵柄を真似ていたらしいがゆ

きづまりつげ忠男の独特のリアル感の

ある絵に出会い意識していまの絵柄に

変えたのだそう。かわぐちかいじの作

品は小説・映画を越えてるところがある。

只、絵が何かセクシャルなところが好き

じゃないんだよな。

とに青春をかけたり、作者の苦悩する姿を描いた作品には伝わって

くるものがあり作品の中に投影された作者あるいは実名で登場する

作者自身のセリフや行動にかなり影響を受けた。この作品は黄色い

涙シリーズとしては28篇つくられた。作品の内容は時にシリアス、時

にコミカルなストーリーで漫画にける作者の思いを描く。絵も作品に合

わせ時に柔らかく、時にシャープであり、モチリアニ調のデフォルメを用

いたりしていておおいにはまってしまい漫画家に憧れたこともあった。

一連の作品の中では「陽だまり」が好きだ。「漫画家とその弟子」も

押しかけの弟子を受け入れたものの弟子の漫画に対する考え方、

生き方のギャップから起こるやりとり、顛末が私小説のスタイルにな

っていて深刻な話をコミカル仕立てにしている面白かった。新宿、

中野、阿佐ヶ谷、吉祥寺などの街を徘徊したのもこの作品と後に続

く「フーテン」の影響でこれらの街の喫茶店では随分時間を潰した。自分たちと同世代のかわぐち

かいじもはっきり漫画家を目指した原点が永島慎二というからちょっと信じられない。絵も一時、永

島慎二の絵柄を真似ていたらしいがゆ

きづまりつげ忠男の独特のリアル感の

ある絵に出会い意識していまの絵柄に

変えたのだそう。かわぐちかいじの作

品は小説・映画を越えてるところがある。

只、絵が何かセクシャルなところが好き

じゃないんだよな。



話しは飛ぶけれど、僕はまえがき、あとがき、解説の類が好きだ。特に作品が面白かった時はその余韻に浸るのにはちょうど良い儀式になる。コミック解説者としては石子順造、尾崎秀樹、峠あかね、草森新一などがいた。僕は峠あかねの解説が好きで特に「漫画家残酷物語」の1つ1つの作品の解説は小説なみの鑑賞といってよく何回も読み返したものだ。文学青年ならぬ漫画青年がどっと増えたのもこの作品の影響は大だと思う。加えて漫画家を志すものにとって登竜門になったのが「COM」だ。新人発掘のため手塚治虫が立ち上げたマンガ専門誌で、泉谷しげるなんかも投稿している。



今は漫画もプロダクション方式になってアシスタントでも充分食っていける(かどうかは知らないが)のか一本立ちしてもアシスタント馴れた表情に乏しい硬質の絵柄を描く作家が多いのが気になる。多少下手でも味のある絵がいいね。例をあげるとモーニングの「警察署長」たかもちげん急逝により代役が描いているけれど絵に魅きつける物がない。

現在の漫画の隆盛は著しいものがあり昔の漫画から考えると劇画という言い方が適当なほど大人の世界までジャンルが広がっている。「まんが道」の中でも語られる言葉。藤子不二雄の映画の迫力を盛り込んだ作品を見て編集者が「これって漫画？」というシーンがある。これはしょせんリアルさでは映画に劣るし、人生を描くには小説にかなわないのだから漫画にしか描けない可笑み、面白みというところを描くべきという主旨だったと思う。しかしながらこれはやっぱり一昔前の考え方で、世間的には未だに漫画は低く見られがちだが、かわぐちかいじ、村上もとか、浦沢直樹の作品など映画小説を越えている作品だって結構あると自分では思っている。

